嗜好の行動科学的研究(第5報)

——嗜好行動の感覚と意識——

栄養指導研究会

東 愛 子, 加 藤 栄 子*, 成 田 弘 子*, 黒 子 千重子*

湯 浅 泰 江**, 和 田 サキ代***

栄養医学研究所, *淑徳短期大学, **四国女子大学, ***宇部短期大学

A Study of the Behavioral Approach to One's Taste (V)

——The Effect of Sense and Consciousness upon Food Preference Behavior——

Research Group of Nutrition Education in Japan

Aiko Azuma, Eiko Kato*, Hiroko Narita*, Chieko Kuroko*, Yasue Yuasa** and Sakiyo Wada***

Institute of Nutrition and Medicine, *Shukutoku Junior College, **Shikoku Women's College
and ***Ube Junior College

Many factors might reflect in man's food preference behavior and analysis of its structure reveal complicated components. The sense and consciousness of young children and their mothers which internally motivate their food preference behavior were analyzed through reasoning words and order of choice for "like" or "dislike" for egg dishes (direct preference factors), size of egg and artificially embellished egg (indirect preference factors). And we considered the relationship between frequency of egg uptake, appearance of food, developmental stages of children and their taste. The results are as follows:

1. Their reasoning words cover many factors which can be divided into two major groups: one is words originated from sense, the other came from consciousness.
2. Both young children and their mothers responded "like" with words related to good taste and "dislike" with those related to the tactile sense. They especially responded "like" with words related to composite taste. Whereas words related to taste referred to the egg itself, the sense of composite taste was used in response to seasonings and other ingredients of the recipe. Likewise, words related to the tactile sense were used with high percentage in referring to cooking methods rather than the egg itself.
3. Young children and their mothers showed different preferences for egg cookery, expressing their preference with different reasoning words, but showing a similar order of choice for the classified reasoning words for each cookery.
4. Children and their mothers expressed preference for egg cookery using concrete and abstract reasoning words respectively. Children often expressed the preference for size of egg and artificially embellished egg using their own abstract reasoning words.
5. They scored high on the direct preference factors for the order of choice of egg cookery, size of egg and artificially embellished egg. Those who like eggs reacted to the indirect preference factor too.
6. Children who like eggs ate lots of eggs and they actively expressed preference of eggs, although the frequency of egg uptake depended largely upon their mother's evaluation.
7. Children's preference of eggs depended partly upon their developmental stages.

は じ め に

食物の嗜好行動には、種々の因子が総合的に反映されており、その過程と構造は複雑多岐にわたっているものと推測される¹⁾。

本報では、この嗜好行動の内的因子に視点を置いて、幼児と母親の嗜好行動の内面に介在する感覚と意識構造の一側面を卵料理の「好き」「嫌い」の理由反応語から検討した。

さらに刺激因子としての卵料理の範囲を拡張して、幼児に面接テスト、ロールシャッハ・テスト(R.T.)などの追調査を行い、幼児自身の反応語と選択順位及び発達段階と嗜好との関連や一次的(直接的)嗜好因子、二次的(間接的)嗜好因子について、また、卵料理の摂食頻度、食形態についても、検討を重ねたので報告する。

方 法

I 本調査

調査方法は第2報²⁾に準ずる。対象は、第2報で行った2,775名の被調査者のうち、卵料理の好き、嫌いの理由について自由回答したもの幼児1,027名、母親650名である。

分析方法は、調査によって得た卵料理の好き、嫌いの理由反応語を感覚、意識などの大・中・小のカテゴリに分類し、幼児と母親の反応語分布状況、また、両者間の関連をみるため順位相関(スピアマン)や χ^2 検定などを行った。

II 追調査

対象は、東京都内の普通幼稚園の園児61名(男児27名:5歳児18名,6歳児9名),(女児34名:5歳児19名,6歳児15名)である。

調査・分析方法はつぎの通りである。

<面接テスト>

卵料理(生卵,ゆで卵,目玉焼,卵焼)4種,色卵(白,赤,ピンク,オレンジ,黄,青,グリーン)7種,形卵(大70g,中50g,小30g)3種,絵卵(人形,ひよこ,ロケット)3種計17種の卵のカラー写真を幼児に呈示し,すべて「卵である」ことを告知し,つぎのような質問を行った(なお,色卵,形卵,絵卵を総称して便宜上各種卵と呼ぶことにする)。

1) 本調査(母親の回答による幼児の嗜好反応語)と追調査(幼児自身の回答による嗜好反応語)間のちがいをさぐるため,卵の嗜好(a:大好き・好き, b:普通, c:嫌い・大嫌い)とその理由を聞いた。

2) 卵の嗜好を一次的嗜好(白卵,卵料理)のほか,二次的嗜好(白を除く色卵,形卵,絵卵)に拡張して,好き,嫌い順に選択させてその理由を聞いた。

これら卵の嗜好,選択順位,嗜好理由の性・年齢別反応比率をみた。

なお,面接は,幼児を1人ずつ面接室に誘導し,2人の調査者が面接と記録を担当した。面接時間は約15分である。

<ロールシャッハ・テスト>

幼児を10人位の小グループにわけて,スライドによるR.T.を行い,幼児の発達段階,適応のタイプ,適応状態に対する反応を卵の嗜好と関連づけて検討した。

<アンケート調査>

母親に幼児の卵の嗜好行動状況を本調査とは別に記入してもらい、面接テストで得られなかったことについて補足した。

なお、追調査では、卵料理の中から、茶わん蒸とプリンを除外した。その理由は両者とも他の素材の影響が大きいこと、摂食頻度が少ないこと、手作り・市販品の区別など条件設定がむずかしいことが本調査によって推測されたことによる。

また、色卵の色の選定は直接・間接的に食欲をそそる色³⁾として報告されているものを参考にした。

結果及び考察

I 本調査（母親の回答による幼児の嗜好反応語）

1) 卵料理の嗜好理由分類及び反応語

表 1 卵料理の嗜好理由分類及び反応語

理由分類			好 き		嫌 い	
大	中	小				
感 覚	味 覚	味 覚	おいしい さっぱり	甘い味 塩・しょうゆ味など	まずい 淡 白	甘い味 油っこいなど
		混合味覚	ごはんにかけて 具によって	サラダ、サンドイッチ すぎやきに入れるなど	ミルク嫌い 具によって	
	視 覚	視 覚	きれい 形がおもしろい	色どりがよい	見た目が汚ない	
		嗅 覚	香り におい	風味 焦げ目	生臭い におい	風味
	皮膚感覚	触 覚	卵黄・卵白好き 口あたり 舌ざわり	とろっと、ポクポク パリッとしているなど	卵黄・卵白が嫌い 口あたり	ヌルヌル パサパサなど
		圧 覚	かたい	やわらかい	卵白がかたい	やわらかい
		温冷覚	温かい	冷たい	あつい	
		内 覚 (アレル ギー)			じんましん 吐気	下痢 食欲
	意 識	感 情	好 き 何となく	楽しい 可愛いなど	嫌い 何となく	気もちわるい 菌がいるなど
		価 値 観	簡単 栄養あり	手近 珍らしいなど	消化がわるい 栄養なし	めんどう 鮮度
		調 理 法	食べやすい 焼きかげん	半熟だから	食べにくい 焼きたりない	半熟だから
		食 形 態	おやつ べんとう	手作り インスタントなど	おやつ べんとう	インスタント
意 識	他	食 習 慣	親・兄弟が嫌い	習慣	親・兄弟が好き	習慣
		食 環 境	テレビの影響		テレビの影響	

注) 母親の回答による

卵料理の好き、嫌いの理由を味覚、混合味覚、視覚、皮膚感覚、内覚などの感覚的側面と感情、価値観、調理法・調理形態、食習慣・食環境などに関する意識的側面との10のカテゴリーにわけてその反応語を対応させてみた結果表1を得た。

この分類について苦慮した点は、たとえば「嗅・味覚は未分化で相互依存的、嗅・味・内部感覚などはとくに情意との結びつきが強い、皮膚感覚は協動的に働く、視覚・聴覚は独立性を保ちながらも相互作用に及ぶ。視覚は他の感覚に比べてもっとも客体化のすすんだ感覚で対象に密着しており、視覚情報に依存する度合いが大きい⁴⁾」など感覚は互いに動的な関係をもち、相互作用を及ぼしあう。つまり、「食物摂取時の感覚が味覚を中心とし、視覚、触覚、嗅覚、その他の感覚を含む総合感覚である⁴⁾」こと、これが食嗜好ともなればさらに高次の心理作用が介入するであろうこと、しかも、直観的思考、あるいは分節化に致らない単純調整の段階にあるといわれている幼児が対象であったことなどである。また、食物（卵）のもつ特性も見逃がせない要素であった。

ちなみに「卵黄が好き」「卵白が嫌い」といった反応語は、単に「卵が好き」という反応語ともいささかニュアンスが異なっており、視覚、嗅覚、味覚、皮膚感覚、感情、調理法のいずれにも関与しているように考えられる（表2）。

表2 卵料理の嗜好理由「卵黄・卵白」の出現率

	全 体				生 卵				ゆ で 卵				目 玉 焼				そ の 他			
	好き 幼・母	嫌い 幼・母	好き 幼・母	嫌い 幼・母	好き 幼・母	嫌い 幼・母	好き 幼・母	嫌い 幼・母	好き 幼・母	嫌い 幼・母	好き 幼・母	嫌い 幼・母	好き 幼・母	嫌い 幼・母	好き 幼・母	嫌い 幼・母	好き 幼・母	嫌い 幼・母	好き 幼・母	嫌い 幼・母
卵黄 {人	79	8	26	4	19	4	3	1	30	3	13	3	30	0	9	0	0	1	1	0
% 100	100	100	100	100	24	50	12	25	38	38	50	75	38	0	35	0	0	12	3	0
卵白 {人	66	7	24	13	3	0	14	10	47	5	4	1	16	0	6	2	0	2	0	0
% 100	100	100	100	100	5	0	58	77	71	71	17	8	24	0	25	15	0	29	0	0

注) その他: 卵黄は卵焼, 卵白はプリン

しかし、本報においては一応もっとも多いのではないかと推測される皮膚感覚に包含した。一方分析の手がかりを得る意味で、理由を大中小の三段階にわけて検討した。

2) 卵料理の嗜好と理由（大分類）

(1) 幼児と母親の好き・嫌い間理由差

幼児と母親の好き・嫌いによる感覚と意識に対する反応のちがいを χ^2 検定によって確かめた結果、幼児の卵料理全体では、好きも嫌いも感覚に高率で有意差はみとめられなかったが、生卵では好きの感覚、またゆで卵では嫌いの感覚が高率とともに0.1%の危険率で著しい有意差を示した。

一方、母親では卵料理全体及びゆで卵が0.1%、生卵が5%の危険率でいずれも嫌いの感覚が高率で有意差を示した。

(2) 好きどうしの幼児・母親間理由差

卵料理が好きなお子・母親間の感覚と意識に対する反応差を χ^2 検定でみると、卵料理全体及び生卵では、幼児は感覚、母親は意識が高率で0.1%、ついで同じパターンでゆで卵、目玉焼、茶わん蒸が1%、卵焼が5%の危険率で有意差を示した（表3）。

以上、卵料理の好き・嫌いによるちがいは生卵、ゆで卵に限られたが、好きどうしの幼児・母親間では、プ

表 3 卵料理の嗜好とその理由大分類出現状況

		感 覚		意 識		χ^2	検 定
		人	%	人	%		
〔全 体〕							
幼児	好き	1,608	73.3	586	26.7	} 2.12	
	嫌い	338	76.6	103	23.4		
母親	好き	752	63.1	440	36.9	} 16.74 (10.34)	*** (**)
	嫌い	360	73.5	130	26.9		
好き	幼児	1,608	73.3	586	26.7	} 38.06 (7.56)	*** (**)
	母親	752	63.1	440	36.9		
嫌い	幼児	338	76.6	103	23.4	} 1.25	
	母親	360	73.5	130	26.5		
〔生 卵〕							
幼児	好き	324	81.2	74	18.8	} 22.97	***
	嫌い	92	61.8	57	38.2		
母親	好き	64	50.4	63	49.6	} 4.48	*
	嫌い	177	61.5	111	58.5		
好き	幼児	325	81.7	73	18.3	} 49.03 (37.62)	*** (***)
	母親	64	50.3	63	49.7		
〔ゆ で 卵〕							
幼児	好き	204	64.6	112	35.4	} 11.95	***
	嫌い	70	84.3	13	15.7		
母親	好き	100	53.2	88	46.8	} 18.82	***
	嫌い	63	81.8	14	18.2		
好き	幼児	204	64.6	112	35.4	} 6.76 (3.38)	**
	母親	100	53.2	88	46.8		
〔目 玉 焼〕							
好き	幼児	169	65.0	41	35.0	} 9.55 (0.07)	**
	母親	66	48.1	69	51.1		
〔卵 焼〕							
好き	幼児	296	75.1	98	24.9	} 3.97 (4.81)	* (*)
	母親	132	67.3	64	32.6		
〔茶 わ ん 蒸〕							
好き	幼児	266	77.3	78	22.7	} 6.63	**
	母親	202	68.2	94	31.8		

自由度 1

* : $p < 0.5$ ** : $p < 0.1$ *** : $p < 0.01$

()内は卵黄・卵白を意識に含んだ場合(人数, %は略)

リンを除いたすべての卵料理にちがいがみとめられたことから、好き・嫌い間よりも幼児・母親間でちがいの大きいこと、また、幼児の好きの理由因子は感覚、母親のそれは意識であることがわかった。

さらに興味深いことは、さきに述べた幼児に高比率の「卵黄・卵白」に関する反応語を、感情、調理法にも関係深いものとして意識の方へ移行して χ^2 検定を行ってみると、当然のことながら、幼児のゆで卵、目玉焼の感覚と意識の比率は逆転し、幼児・母親間の差が消失したことである。このことは、分類がいかにもむずかし

いかを示唆しているともいえる。

3) 卵料理の嗜好と理由 (中分類)

(1) 幼児と母親の好き・嫌い間理由差

理由を味覚 (混合味覚を含む), 感覚 (視覚, 嗅覚, 皮膚感覚, 内覚), 感情, その他 (価値, 調理法・食形態, 食習慣・食環境) にわけて卵料理の好き, 嫌いによる反応差を χ^2 検定で検討した結果, 幼児ではプリン, 母親では茶わん蒸を除いたすべての卵料理に著しい有意差をみとめた (表4)。

表4 卵料理の嗜好とその理由中分類 χ^2 検定結果

	幼 児		χ^2	母 親		χ^2	好 き		χ^2
	好き	嫌い		好き	嫌い		幼児	母親	
全 体	味覚 ↑	感覚 ↑	*** 325.7	味覚 ↑	感覚 ↑	*** 386.7	味覚 ↑ 感情 ↓		*** 47.5
生 卵	味覚 ↑	感覚 ↑	*** 239.3	味覚 ↑	感覚 ↑	*** 194.2	味覚 ↑	感覚 ↓	*** 48.1
ゆ で 卵	味覚 ↑	感覚 ↑	*** 79.1	味覚 ↑	感覚 ↑ 感情 ↓	*** 100.4	感情 ↓	味覚 ↑ 感覚 ↓	*** 23.1
目 玉 焼	味覚 ↑	感覚 ↑	*** 31.2	味覚 ↑	感覚 ↑ 感情 ↓	*** 22.1	その他 ↓	味覚 ↑ 感覚 ↓	*** 29.3
卵 焼	味覚 ↑	感情 ↓	*** 42.1	味覚 ↑	感情 ↓	*** 29.3			
茶わん蒸	味覚 ↑	感情 ↓	*** 23.4						
プ リ ン				味覚 ↑	感情 ↓	* 9.2	感覚 ↑	味覚 ↑ その他 ↓	** 15.2

自由度 3

* : $p < 0.5$ ** : $p < 0.1$ *** : $p < 0.01$

(2) 好きどうしの幼児・母親間理由差

卵料理が好きどうしの幼児と母親間における χ^2 検定の結果は, 卵料理全体, 生卵, ゆで卵, 目玉焼に 0.1 %, プリンに 1 % の危険率で有意差が証明された (表4)。

以上のことから, 大分類とは逆に好きどうしの幼児・母親間によるちがいがいよりも, 幼児・母親個々の好き・嫌い間による差の方が広範囲にわたっていることがみとめられた。

また, 全般的に幼児・母親ともに好きの味覚, 嫌いの感覚が高率, 感情が低率で有意差を示していること, その傾向はとくに母親に強いこと, 好きどうしでは, 母親の味覚が高率, 感覚が低率, 幼児のそれは卵料理によって異なっていることなどが確認された。

なお, 嫌いどうしは少数のため検定ができなかった。

4) 卵料理の嗜好と理由 (小分類)

(1) 理由小分類別幼児と母親の嗜好差

理由小分類別に幼児と母親間の嗜好差を χ^2 検定で確かめた結果は表5のとおりであった。すなわち,

視覚: 有意差はみられなかったが, 幼児の好きが高率であった。

嗅覚: 卵料理すべてにわたって嫌いが高率であったが, とくに母親にその傾向が強く有意差を示した。女性

表 5 理由小分類別幼児と母親の嗜好差

			好　　き		嫌　　い		χ^2	検　　定	
			人	%	人	%			
〔全　　　体〕									
味	覚	幼児	808	94.7	45	5.3	}	10.84	* * *
		母親	492	90.1	54	9.9			
嗅	覚	幼児	11	21.2	41	78.8	}	8.83	* *
		母親	5	5.1	94	94.9			
皮　膚　感　覚	覚	幼児	403	66.6	202	33.4	}	25.3	* * *
		母親	178	50.1	177	49.9			
感	情	幼児	246	84.2	46	15.8	}	3.98	*
		母親	250	77.9	71	22.1			
〔生　　　卵〕									
皮　膚　感　覚	覚	幼児	32	40	48	60.0	}	13.8	* * *
		母親	19	16.4	97	83.6			
感	情	幼児	35	51.5	33	48.5	}	6.0	* *
		母親	30	32.3	63	67.7			
〔ゆ　で　卵〕									
皮　膚　感　覚	覚	幼児	88	56.4	68	43.6	}	11.5	* * *
		母親	22	31.9	47	68.1			
食習慣・食環境		幼児	15	93.8	1	6.2	}	3.8	*
		母親	4	50.0	4	50.0			
〔茶わん蒸〕									
皮　膚　感　覚	覚	幼児	73	76.8	22	23.4	}	10.0	* *
		母親	65	95.6	3	4.4			
〔プ　リ　ン〕									
味	覚	幼児	196	93.3	14	6.6	}	9.3	* *
		母親	117	83.0	24	17.0			
皮　膚　感　覚	覚	幼児	142	92.2	12	7.8	}	8.6	* *
		母親	69	79.3	18	20.7			

自由度 1

* : $p < 0.5$ ** : $p < 0.1$ *** : $p < 0.01$

は男性に比べて嗅盲も少なく、むしろホルモンの変動などによって敏感に反応する⁴⁾ことが知られているが、そのような影響もあるのではなかろうか。

味 覚：味覚は幼児・母親ともに好きの理由因子として高率であったが、その中でも全体とプリン幼児の好きが高率で有意差を示した。

混合味覚：有意差はみられなかったが、生卵、茶わん蒸に対する反応はともに幼児が優位であった。また生卵嫌いの混合味覚は幼児・母親ともにゼロであった。

皮膚感覚：卵料理全体では幼児の好きが高率、生卵、ゆで卵では母親の嫌いが高率、茶わん蒸は母親の好きが高率、プリン幼児の好きが高率で有意差を示した。

感 情：卵料理全体と生卵においては幼児の好きがやや高率で有意差を示したが、生卵を除いた他の卵料理では母親の方が好き方向に高率であった。

価値観：価値観は、母親が圧倒的多数を占めた。とくに生卵、ゆで卵、茶わん蒸の好きが高率で、嫌いの約2.5倍にも及んだ。

このほか、調理法・食形態及び食習慣・食環境ともに、幼児の好きが高率で後者のゆで卵に若干の有意差を認めた。

以上のことから、幼児・母親ともに高率であったのは好きの味覚、幼児が優位であったのは好きの混合味覚、視覚、皮膚感覚、食習慣、母親の特徴は、好きの感情、価値観、嫌いの嗅覚、皮膚感覚が高率を示したことであった。

(2) 幼児と母親の嗜好理由出現状況（比率と順位）

卵料理別に10項目の理由出現率を幼児と母親の好き・嫌い別にみると図1に示すとおりであるが、さらに順位をとってみると全体ではつぎに示す通り、ともに好きの1位は味覚、嫌いの1位は皮膚感覚であった。また相違点は、価値観で好きも嫌いも幼児が低位なのに比べ、母親は上位を占めた。さらに混合味覚は幼児が2位、母親は6位であった。

好きの順位

幼児——味・混・感・皮・調・食・視・嗅＝価＝ア

母親——味・感・皮・価・調・混・食・視・嗅＝ア

嫌いの順位

幼児——皮・感・味・嗅・食・
ア・調・混・視＝価

母親——皮・嗅・感・味・価・
ア・調・混・視

以上のことから、好きの味覚が1位を占めたことは、さきの中分類の結果とも一致したが、これを卵料理別にみると生卵好きの幼児においては、混合味覚が54%の高率で味覚の19%を抜いて1位であった。

また、嫌いの中で上位を占めたものは、幼児ではプリンの味覚を除いてすべての料理は皮膚感覚、母親では、生卵、ゆで卵が皮膚感覚、目玉焼、卵焼、プリンに味覚、茶わん蒸は嗅覚であり、幼児は母親に比べて単一であった。

また、これらの中で群を抜いて高率を示したのは、卵焼好きの味覚（幼児65.7%、母親59.7%）、と

図1 卵料理の嗜好理由小分類別分布状況

ゆで卵嫌いの皮膚感覚（幼児82%，母親61%）であり、両者ともに、もっとも好きな卵料理は卵焼で、理由項目は味覚、嫌いのそれはゆで卵で、理由項目は皮膚感覚であることがわかった。

(3) 卵料理別嗜好理由分類出現順位相関関係

理由分類10項目の出現率の幼児と母親の順位相関係数は、卵料理の全体では、好きが2.5%，嫌いが1%の有意水準で正の相関を示した。卵料理別好き順では、生卵、ゆで卵、茶わん蒸、プリンに1%，目玉焼、卵焼2.5%に嫌い順でも卵焼、目玉焼、茶わん蒸、プリンが1%，生卵2.5%，ゆで卵5%の有意水準で同じく正の相関を認めた。

また、幼児の好き、嫌い間の順位相関検定の結果はプリンが2.5%，母親のそれは目玉焼が5%の有意水準で正相関を示した（表6）。

これらのことから、幼児母親間の出現順位は卵料理によって若干の相違はあるものの嫌いのゆで卵以外は、かなり似かよっていることがわかった。

(4) 嗜好理由分類別卵料理出現順位相関関係

理由分類別に卵料理の出現順位を幼児と母親の卵料理好き、嫌い別にとり、相関係数を出すと、好きの味覚、混合味覚が0.1%，嫌いの味覚が1%の有意水準で正の相関を示したが、視覚や価値観などは出現率0が多く検定が不可能な項目もあった。

(5) 嗜好理由反応語分布状況

幼児と母親の卵料理好き、嫌いの理由反応語の中で高率を占めたもの5位の分布状況は表7のとおりであった。

この表から、幼児・母親ともに好きの理由反応語は味覚に類する「おいしい」で、この反応語は卵料理全般に高い比率を占め、ついで「甘い」が、卵焼、プリンの好きと嫌いの両方に高率を占めていることがわかる。生卵の混合味覚「ごはんにかけて」は、幼児・母親ともに100%“好き”の反応語として表現されており、卵＝生卵＝ごはんにかけて……という日本人独特の食習慣が現在なお生きつづけているものと興味深い。このことは母親の卵＝生卵＝栄養がある、簡単、……といった価値観にも象徴されていた。

幼児が母親に比べて特異的な反応を示したのは卵の“卵黄・卵白”であった。触覚に類する「口あたり」「パサパサする」「ヌルヌルする」圧覚に類する「かたい」「やわらかい」視覚に類する「きれい」「色どりがよい」あるいは、触覚と視覚の両方に類する反応語などがすべて“卵黄・卵白”に代表されている感もあった。さらに、卵黄と卵白の調理過程による変化が触覚につながり、それが「好き」と「嫌い」の規定因子になっていることも推測された。

また、幼児はまわりの人に影響されやすいことも推察される。一方母親は、幼児の反応語がより具体的・具象的であるのに反し、感情や価値観などに類する抽象的表現が目立った。

II 追調査（幼児自身の回答による嗜好反応語）

1) 性年齢別卵の嗜好状況

表6 幼児と母親の理由小分類出現順位相関
(スピアマン)

		好 き		嫌 い	
		r_s	検定	r_s	検定
全	体	0.724 (0.761)	** (***)	0.803 (0.633)	*** (**)
生	卵	0.827 (0.794)	*** (***)	0.661 (0.818)	** (***)
ゆ	で 卵	0.773 (0.724)	*** (**)	0.564 (0.703)	* (**)
目	玉 焼	0.663	**	0.779	***
卵	焼	0.727	**	0.889	***
茶	わん蒸	0.839	***	0.739	***
プ	リ ン	0.806	***	0.752	***

n=10

* : $p < 0.05$ ** : $p < 0.025$ *** : $p < 0.025$

()内は卵黄・卵白を調理に含んだ場合

表 7 卵料理の嗜好理由反応語出現状況

嗜好度	年順	小分	生	卵	%	小分	ゆで卵	%	小分	目玉焼	%	小分	焼	%	小分	茶わん蒸	%	小分	プリン	%	
好	幼	1	混	ごはんにかけて	54	味	おい	しい	23	味	おい	しい	30	味	おい	しい	41	味	おい	しい	25
		2	味	おいしい	19	感	卵	白	15	感	好	い	17	味	甘	具によ	20	味	甘	い	16
		3	感	好	9	触	好	き	14	触	卵	い	12	感	好	き	13	触	口あ	たり	16
		4	触	卵	6	触	黄	触	10	触	黄	べ	6	調	食	あ	11	感	好	き	13
		5	調	食べやす	5	混	ペンサ ラダに 入れて	7	調	焼	白	ん	5	調	べ	う	4	調	お	や	9
き	母	1	感	好	24	味	おい	しい	27	味	おい	しい	32	味	お	い	29	味	お	い	35
		2	味	おいしい	20	感	好	き	26	味	甘	い	26	感	好	き	17	感	好	き	18
		3	混	ごはんにかけて	20	価	簡	単	8	価	好	い	6	触	口あ	たり	9	触	口あ	たり	16
		4	価	栄養あ	14	味	さ	っ	5	味	食	べ	5	調	食	べ	6	味	甘	い	9
		5	価	簡	14	調	食	べ	4	調	ボ	ク	5	調	具によ	て	5	庄	やわ	らか	6
嫌	幼	1	愛	きもちわる	21	触	パ	サ	58	味	甘	い	14	混	具によ	て	28	味	甘	い	33
		2	触	スル	19	触	卵	黄	16	触	パ	サ	14	庄	やわ	か	11	庄	やわ	か	13
		3	嗅	生	12	感	嫌	い	7	調	ア	レ	12	嗅	に	い	9	触	ス	ル	10
		4	触	バ	10	内	食	べ	7	触	か	ま	12	温	あ	い	8	触	口あ	たり	8
		5	触	卵	9	調	食	べ	6	触	ま	ず	8	内	ア	レ	6	価	めん	ど	8
い	母	1	触	スル	27	触	パ	サ	52	味	ア	レ	16	嗅	に	い	36	味	甘	い	31
		2	嗅	生	25	嗅	生	臭	8	調	バ	サ	13	内	ア	レ	27	触	口あ	たり	16
		3	感	きもちわる	23	味	ま	ず	7	味	ま	ず	11	触	口あ	たり	18	内	ア	レ	14
		4	価	消化	8	触	卵	白	5	嗅	甘	い	7	温	あ	い	9	庄	やわ	か	10
		5	内	ア	2	内	ア	レ	5	内	油	こ	11	混	具によ	て	9	味	ま	ず	7

第2報において、女兒は男児よりも卵料理を好み、欲求度も高いことが報告されているが、この調査では、性、年齢をとわず卵は大好きが約65%、好きを加えると70%にものぼった。しかし、嫌い、大嫌いにおいては男児10%、女兒5%と若干のちがいをみせた。また、6歳児は男女ともに嫌いはなく年齢による相違を示したが、これは調査数が少ないためさらに検討を要するものと考えられる。

2) 卵料理及び各種卵の嗜好状況

(1) 17種の中の選択順位及び比率

卵料理及び各種卵全体の中から、好きなものの、嫌いなものの出現比率をみると、好きでは「白卵」と「卵焼」「目玉焼」「ゆで卵」など一次的嗜好が上位を占めた(図2)。

(2) 各パートの中の選択順位及び比率

卵料理、色卵、形卵、絵卵別に選択させた好き、嫌いの反応比率をとってみると、全体では、卵料理、色卵、絵卵、形卵の順に高率を示した。そしてa群(大好き・好き)もまた同じ傾向を示した。b群(普通)は、色卵と卵料理が入れ変っており、c群(嫌い・大嫌い)からは絵卵が消失している。

図2 卵の嗜好(好き・嫌い)と各種卵の比率

これらをさらに好き、嫌い別にみると、どの群も卵料理、形卵は好き方向に、色卵、絵卵は嫌い方向に高率であった。また、卵の好き、嫌い別に選択順位をみると好きでは3群ともに卵料理、色卵、形卵、絵卵の順位であったが、嫌いではc群のみが異なったパターンを示した。即ち、他の2群では色卵、絵卵、卵料理、形卵の順に高比率であるのに対しc群では卵料理、色卵、形卵、絵卵の順になっており、卵料理が嫌い因子の1位を占めた。

このことは、好きなものは一次的嗜好因子をさらに二次的嗜好因子に延長させる余裕をもっているのにもかかわらず、嫌いなものは一次的嗜好因子にダイレクトに反応しているとも解釈できよう(図3)。

図3では、色卵の中の白卵の比率が示されていないが、白卵の好きをみるとa群9.3%、b群38.5%、c群40%と必ずしも好き群に高いともいえない。

また、このc群についてさらに分析

(注) a: 大好き・好き
b: 普通
c: 嫌い・大嫌い

図3 卵の嗜好(好き・嫌い)と各種卵の比率

を加えると、c群に属する年齢は5歳児で、母親に行ったアンケート調査の結果性格は、依存的、消極的な子であった。後述する R. T. の結果は、形<色が多く、情緒的独善型、知的独善型、知的独自型に反応していた。

二次的嗜好因子に対する余裕には、これら性格や発達段階の影響、さらには幼児特有の遊びの要素も含まれるのではないかと考えられる。

3) 卵料理及び各種卵の嗜好理由反応語

卵料理及び各種卵の嗜好理由は表8のとおりであった。

卵料理の反応語の好きでは、目玉焼、嫌いは生卵に関するものが多かったが、特異的な反応語は、ゆで卵に対するもので「半分だから」また、混合味覚に対する反応で「ソース」「バター」などの調味料に関するもの(本調査で出現したしょう油は見当らなかった)、あるいは、他の素材の混入したもので、「かにたま、おすしの具、チーズ入り卵焼」などが出現したが、茶わん蒸・プリンは出現しなかった。

また、「卵黄・卵白」では生卵の「卵白」は嫌い、ゆで卵、目玉焼の「卵黄」は好きが多く、本調査のそれとはほぼ一致した。

色卵・絵卵では男・女児ともに情緒的表現が多かった。

形卵では、両性ともに大きい卵の選択性が高く、とくに5歳児にその傾向が強かった。そしてその選択理由に女児が「大きいから」といっているのに比し、男児では「大きい卵がいい」と積極的な回答をしていた。また、大きい卵に対して「仲間はずれ」「大きいのは黄身が2つ」など母親の回答では得られない表現もあった。

また、幼児独自の反応語で「どうしても」「わからない」といったばくぜんとした表現が多くみられた。

このほか、本調査における好きの反応語が「好き」「おいしい」など抽象的表現が多かったのに比べ、嫌いのそれは反対語の「嫌い」「まずい」という表現は少なく、より具体的な表現が多かったが、追調査では、むしろ逆に好きな理由反応語に具体的でしかも連想表現が多くみられた。さきに述べた好きグループに二次的嗜好要素が高率であったのと同じで、幼児の関心は、好き方向に拡がっているものと考えられる。

しかし表現そのものは、母親のそれに比べて単純で直感的であることは、本調査、追調査ともに変わりはない(表8)。

4) 卵の嗜好と幼児の発達段階

卵の嗜好と発達段階との関連をみるためにまず、R. T. による発達段階、適応のタイプ、適応状態の良否について検討した。R. T. の体験型による幼児の発達段階の指標は、発達がすすむにつれて色彩反応から形態反応への移行がみられるといわれているが、この調査の全体では、形<色58%、形>色26%、形=色16%と形<色が過半数を占めた。これを性、年齢別にみると5歳女児→5歳男児→6歳女児→6歳男児の順に形<色が減少しており、しかも、好き群よりも嫌い群に形<色が多く出現していた。

さらに適応型との関連をみると男児は知的、女児は情緒的適応型が多く、発達段階のすすむにしたがって独自型、独善型が減少し、常識型への移行がみられた。また適応状態も常識型の方が良好で、卵の大好き、好き群が多かった。

5) 卵の嗜好と摂食頻度

卵の好き、嫌い別に卵をどの位の頻度で食べているかについて調べた結果図4を得た。この図から、卵の好きな幼児は食べている頻度も高いことがわかる。そしてそれは卵料理の種類によって異なり、卵焼は毎日食べているものの比率が高いし、目玉焼、炒り卵は低い。しかし、週3回となると、目玉焼、炒り卵、ゆで卵、

卵焼ともに高く、月1回では生卵が1位を占めている。生卵の嫌いなものでも月1回は食べているものが約45%いるというわけである。また、一般に嫌いなものは食べないし、回答なしも多く、嫌いグループの無関心さはここでも実証された(図4)。

また、第2報において、調理法の複雑な茶わん蒸、プリンの頻度が少なく、卵焼は高いことを述べているが、この調査でも卵焼程度の調理はかなりの頻度でつくられていることがわかった。

6) 卵の嗜好と食形態

卵の嗜好と形態については図5の通り生卵、目玉焼、炒り卵は朝食に、卵焼、ゆで卵、炒り卵はおべんとうに食べている率が高い。また、おやつに食べているのは、わずかではあるが、ゆで卵であった。

ま と め

幼児と母親の嗜好行動の内面に介在する感覚と意識構造の一側面を卵料理の好き、嫌いの理由反応語から検討した(本調査)。また、卵料理及び各種卵(色をつけた卵、絵を描いた卵、形の異なる卵)の好き・嫌いの理由反応語を選択順位ならびに卵料理の摂食頻度・食形態、さらには、幼児の発達段階との関連についても考察し(追調査)、つぎのような結果を得た。

1) 卵料理・各種卵の嗜好理由反応語分類

卵料理・各種卵の好き・嫌いの理由反応語は、幼児・母親ともに感覚(味覚、混合味覚、視覚、嗅覚、皮膚感覚、内覚)及び意識(感情、価値観、調理法・食形態、食習慣・食環境)の多因子に及んだ。

2) 卵料理の嗜好と嗜好理由

本調査における幼児と母親の卵料理好き・嫌い間 χ^2 検定の結果、嗜好理由大分類(感覚)では幼児・母親ともに生卵、ゆで卵に、中分類(味覚・感覚)では幼児はプリン、母親は茶わん蒸、プリン以外の卵料理に、

図4 卵の嗜好と頻度

図5 卵の嗜好と形態

小分類（味覚・皮膚感覚）では両者ともにプリンに有意差をみとめた。

幼児と母親の卵料理好きどうしの χ^2 検定結果は、大・中分類ともに幼児は感覚、母親は意識が高率で前者はプリン以外の卵料理、後者は生卵、ゆで卵、目玉焼に有意差がみとめられた。

両者が出現率で一致をみたのは、好きの卵焼の味覚、嫌いのゆで卵の皮膚感覚、幼児に特徴的なのは生卵好きの混合味覚であった。

卵料理別嗜好理由小分類順位相関の検定結果は、嫌いのゆで卵以外はかなり似かよっており、正の相関を示した。

3) 卵料理の嗜好理由反応語

本調査による反応語は幼児・母親ともに好きが、味覚、嫌いが皮膚感覚に類するものが高率であった。また幼児に特異的なのは卵黄と卵白に対する嗜好表現であった。さらに、母親が感情、価値観などの抽象的反應語が多かったのに比べ、幼児のそれは調理法や食形態、食環境など身近かな生活体験による具象的反應語も多くみとめられた。また、両者ともに嫌いの反應語は好きのそれより具体的かつ多様化の傾向にあった。

追調査における反應語は、母親の回答によるものよりも幼児独特の感受性をともなった単純明快な表現が多かった。そしてそれは、一次的嗜好理由より二次的嗜好理由により強く反映されていた。

4) 卵料理及び各種卵の嗜好と選択順位

追調査における選択順位は白卵、卵料理の一次的嗜好が上位を占めた。興味深いことに卵好き群が二次的嗜好にも反応し、余裕をみせたのに反し、嫌い群は一次的嗜好因子に密着している傾向がみられた。

5) 卵料理の摂食頻度及び食形態

卵の好きなものはよく食べており、嗜好表現も積極的、嫌いなものは回答なしも多く無関心さがうかがえた。卵料理の中でもっとも摂食頻度の高いものはおべんとうに入れる卵焼であり、これは簡単、栄養があるという母親の価値観にも影響されていることが推測された。

6) 卵の嗜好と発達段階

ロールシャッハ・テストによる発達段階からみると発達がすすむにつれて独自型・独善型から常識型への移行がみられ、適応状態も良好、卵好き群に属するものが多かった。

以上のことから、食嗜好の内的構造の複雑さについて、また、分類やアプローチの方法について種々の示唆を得ることができた。

なお、この稿の一部は日本栄養改善学会において発表した。

文 献

- 1) 栄養指導研究会：栄養学雑誌，33（4）169～193（1975）
- 2) 栄養指導研究会：栄養学雑誌，37（6）275～288（1975）
- 3) 河村洋二郎他：食欲の科学，p. 149～150（1972）医歯薬出版
- 4) 八木 颯：講座心理学（3）感覚，p. 8，123，268，291（1969）東大出版会

（受付：昭和54年6月5日）